

TOYOTA
COMMUNITY
CONCERT



第240回市響

交響樂の午後

1994年

平成6年7月10日(日)

午後2時 開演

市川市文化会館大ホール

240 th



市制施行60周年記念
平成6年度市川市文化祭 参加

主催/市川市教育委員会 市川交響楽団協会

協賛/千葉県トヨタ販売店グループ トヨタ自動車(株)

協力/日本アマチュアオーケストラ連盟

プログラム

ハープの為の小協奏曲 変ト長調 作品39ガブリエル・ピエルネ
Concertstück Pour Harpe et Orchestre Gabriel Pierne
(1863-1937)

Allegro Moderato
~Andante
~Allegretto scherzando
~Andante molto

演奏時間 約15分

————— 休 憩 —————

交響曲第4番 変ホ長調<ロマンティック>.....アントン・ブルックナー
IV. Symphonie Es-dur <Romantische> Anton Bruckner
-1878/80年稿 改訂第二版 L.ノヴァーク校訂- (1824-1896)

第1楽章 Bewegt, nicht zu schnell
第2楽章 Andante quasi Allegretto
第3楽章 Scherzo, Bewegt
Trio. Nicht zu Schnell
Keinesfalls schleppend
第4楽章 Finale. Bewegt, doch nicht zu schnell

演奏時間 約60分

指 揮 : 早川 正昭
ハープ独奏 : 早川りさこ
管 弦 楽 : 市川交響楽団

●出演者のプロフィール

指揮：早川正昭



1934年市川市生まれ。東京芸術大学にて指揮を渡辺暁雄に師事。60年同作曲科を卒業。翌年東京ヴィヴァルディ合奏団を創設、現在新ヴィヴァルディ合奏団常任指揮者。

1971、73、77年に東京ヴィヴァルディ合奏団を率いてヨーロッパ各地で演奏、ヨーロッパ、アメリカで自作品を指揮して、国際的にも認められている。78年から1年間、文化庁海外研修員として訪欧し、ミュンヘン、ウィーンを中心に古典舞踊について研修を積んだ。

作曲家として「レクイエム・シャーンティ」他多数の作品が、ドイツから出版されており、ヨーロッパで高く評価されている。ヴィヴァルディに関する訳書もあり、レコードも多数録音している。交響楽団の指揮者としても活躍中で、東京都交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、またアマチュアの栃木県交響楽団等に客演、ルージャチコーバ、ランパル等とも協演している。

市響団友であり、協演は数多い。1985年の市川市文化会館落成記念「ベートーヴェン第九演奏会」でも好評を博した。

ハープ：早川りさこ



東京芸術大学卒業。1987年ウィーン国際ハープ会議の審査に合格、新人コンサート出演。NHK-FM「フレッシュコンサート」に出演。88年、第1回福井ハープフェスティバルのオープニングコンサートでソリストをつとめる。89年渡米、S. マクドナルド女史に師事。

90年第2回日本ハープコンクール第2位。91年第3回日本ハープコンクール優勝。91年、92年サンフランシスコのハープ音楽祭に招待され演奏、好評を博す。

92年、第5回福井ハープフェスティバルの福井音楽賞コンクール（ハープの為の新曲を弾いて競う世界で初めての作曲家とハープのためのコンクール）最優秀演奏賞受賞。

93年東京文化会館にてリサイタル開催。名古屋フィル、新ヴィヴァルディ合奏団と協演。ハープをJ. モルナール、桑島すみれ、井上久美子、室内楽を大川内弘、金昌国、篠崎史子の諸氏に師事。市川交響楽団との協演は、89年の第202回市響「室内楽の夕べ」以来となる。

曲 目 解 説

ハープの為の小協奏曲 変ト長調 作品39

G. ピエルネ

ガブリエル・ピエルネ(1863-1937)はドビュッシーやラベルと同年代のフランスの音楽家で、作曲、演奏、音楽教育の各方面で業績を残しています。

彼は教会オルガン奏者の職をセザール・フランクから引き継ぐとともに、コロヌ管弦楽団の指揮者をつとめ当時の作曲家の作品を数多く世に出しています。

彼自身の作品はオペラ、バレエ、カンタータ、劇音楽など多岐にわたり、このうち室内楽作品や管弦楽曲の小品では、サン・サーンスを継承した作風が多くみうけられます。

本日演奏する「ハープの為の小協奏曲」(ハープとオーケストラの為の演奏会小品)は、1901年に作曲された1楽章形式の小品で、叙情的な旋律と華麗なハープのひびきを効果的に使った、親しみやすい作品です。

曲は大きく4つの部分に分かれ、それらが少しずつかたちを変えて順番にあらわれます。

冒頭の“アレグロ・モデラート”の部分では弦、管の信号音の後に牧歌的な動機と独奏ハープのカデンツァが続き、最初の主題が示されます。

次の“アンダンテ”の部分は3/4拍子の印象的な旋律で、この部分は曲の後半でも繰り返しあらわれます。

“スケルツァント”では独奏ハープと弦のピチカート、フルートのかけあい曲想が高揚し、前述の“アンダンテ”の部分が再現されます。

曲の終結部“コーダ”は、オーケストラの和音の上でハープがカデンツァを奏で、全楽器のffでしめくります。

交響曲第4番 変ホ長調<ロマンティック>

A. ブルックナー

アントン・ブルックナーは、オーストリアのリンツ市の南方数キロに位置する静かな農村で生まれた。彼のまわりには音楽家はほとんどいなかったが、いつも音楽がみちあふれていた。

教会には音楽がつきものである。近くの聖フローリアン大修道院の教会へいけば、大オルガンの壮麗な響きを耳にすることができた。彼は父と同様に教師の道を志し、リンツで師範学校の小学校教員養成過程にはいった。ひょんなことから音楽の才能を発揮した彼は、32才にしてリンツ大聖堂オルガニストに就任する。その後の彼の活躍はご承知のとおりである。

50才でヴァーグナーに第3交響曲を献呈した彼は、第4交響曲に着手する。この曲はブルックナーの交響曲の中でも最も親しみやすい作品であり、また作曲家自身が手紙などで打ち明けているように音楽的要素などの興味深い点をいくつかみせている。以下で作者自身の言葉で紹介したい。

第1楽章 「冒頭のホルンのソロは町の庁舎から一日の始まりを告げるホルン」

「第2主題のヴァイオリンはシジュウカラの“ツイツイペー”という鳴き声」

第2楽章 「歌、祈り、小夜曲」

第3楽章 「狩りの主題」

第4楽章 「民衆の祭り」

オルガン奏者であったブルックナーが作曲した第4交響曲は、ひとつひとつの音をあたかもレンガのように重ねあわせながらつみあげた大聖堂のような風格が感じられます。

ウィーンのブルックナー

須 永 恒 雄

(団員・独文学)

1868年10月1日開始の冬学期から楽友協会音楽院に教鞭を執るべくウィーンに到着早々、まずブルックナーが訪れたのは宮廷楽団の楽長ヨーハン・ヘルベックの許であった。これまで故郷近くのリンツは聖堂オルガニストの地位に甘んじていたこの作曲家の隠れた真価を認め、たゆまぬ尽力の末ようやく帝国の主都に招聘するまでにこぎつけたその恩に報い、また儀礼を尽くしたいと第一番に駆けつけてみると、あいにく楽長そのひとは留守。迎え出た令夫人に、この遠来の客は、お国なまり丸出して口ごもりながら繰り返しひたすら謝意を表し、新聞紙にくるんだ25グルデンの銀貨を夫人の手に握らせてそそくさと辞し去ったという。このいささか珍妙な感謝の贈物に、後にヘルベックの息子の伝えるところによれば、帰宅した楽長は夫人ともども、当惑し、笑い、かつ感動こそすれ、少しも腹の立ちようがなかった。

これより遡ること7年、同音楽院に対位法を講じ、かつてはシューベルトも死を間近にしばしその許で学んだという、著名な理論家ゼヒターについて修業研鑽を積んだブルックナーは、その成果を公認のものとすべく、修了試験を願い出たことがあった。晩秋の一日、ピアリステン教会のオルガンを用いて行われたその試験に、思わず試験官の一人が「残酷」と評した難渋な課題テーマからも壮麗なフーガを展開して一同を驚嘆させた時の主査ヘルベックが洩した一言はよく知られている、曰く「彼が我々を試験すべきだった」と。この時以来のヘルベックの好意が、死去した師ゼヒターの後任としての今回のウィーン招聘に繋がったとブルックナーは承知していた。

就任の翌年、フランスはナンシーの教会に新設されたオルガンの弾初めに招かれたブルックナーは、決心がつきかねてハンスリックに伺いをたてると、大いに励まされて旅立つが、この頃はハンスリックも未だ敵に回ってはいなかった。リンツ時代のブルックナーにその作品を賞賛してウィーンへ出ることを勧めさせた彼は、同席の「カジノ」で、気に入らない音楽家のことを引き合いに出して「私が葬り去りたいと思えば誰であれ、実

際に葬り去ってみせる」と豪語したが、後年これは現実にブルックナーの身に降り掛かることとなる。

ナンシーでの成功によってオルガン製作社からパリに招かれ、ノートルダムで催した音楽会には、フランク、サン＝サーンスをはじめ当時のフランス音楽界の重鎮が顔を揃えたが、一層の好評を博して、カヴァイユ＝コルの名器が初めて十全に鳴り響いたとまで褒めちぎられる。楽器の制作者からも懇篤な感謝状を授けられた。また翌々年ロンドンではアルバートホールに新設された大オルガンの弾初めに招かれて海を渡り、前にもまして大好評を得る。その昂揚した気分の中で第2交響曲の作曲を開始するが、一方、前年から授業を引き受けていた聖アンナ学校では醜聞事件に巻き込まれる。即ち授業中、或る女生徒に余りにも素朴に親愛の情を披瀝したのを別の女生徒が聞き咎めて嫉妬したのが原因とか、あわや失職の憂き目に遭うところであった。あわてたブルックナーは内外に盛んに就職活動を行うが、幸か不幸か徒勞に終わってこの地にとどまり、また聖アンナの事件も大事に至ることなく収まりがつく。

翌72年は又、第3ミサ曲の成功と、フィルハーモニカーからの第2交響曲の上演拒否と、明暗交々の年となるが、この類の不運はなにもブルックナーに限ったことではない。かのヨハン・シュトラウスの「美しき青きドナウ」ですら当初は同様の憂き目を見たという。それにもめげず、ブラームスの稚気ある評言によれば「悪い交響曲熱」にかかったこの作曲者は、恰も否応無く進行する「病理現象」のように次なる第3交響曲にとりかからずにはいられなかった。夏にはウィーンに流行ったコレラを避けて湯治方々訪れたマリーエンバートで早くも終曲の草稿を完成している。是非とも敬愛措く能わざるヴァーグナーに捧げたいものとパイロイトはヴァーンフリート荘を訪れ、めでたく巨匠に同曲の献呈を受け入れて貰ったのは周知の逸話である。有頂天の余勢をかって10月26日バッハのハ長のトッカータと即興演奏の後に自作の第2交響曲を据えた音楽会で成功をおさめ、

倦まず作曲に勤しんで同年大晦日に第3番を全曲完成、明けて正月2日には第4番に筆を下ろしている。まさしく3日にあげずの精進ぶりと言ってよいが、その分作曲以外の公務に時間をさかれるのが惜しく、お上に生活の為の年金交付を願い出るが却下され、同時に大学に職を得ようと運動する。かねてから大学こそは理想の職場と思い定めて、以前にも一度試みて果さなかったこの地位の獲得を、オルガンの外遊演奏と第3ミサと第2交響曲の三つの成功、また第3交響曲の献呈を受け入れたヴァーグナーの寵愛を礎に、いま一度繰り返して試みたのである。

すでに大学に音楽美学を講じて教授の地位を占めていたハンスリックは審査官として、作曲法は専門学校にこそふさわしくとも大学にはなじまない教科との所見を掲げてブルックナーの請願を却下した。もともとハンスリックはブルックナー一個人に悪感情を抱いていたわけではない。ウィーン行きを決心する少し前にも、助言を求めた作曲家を、この絶大な権勢を誇る批評家は大いに励まして、自分は何一つ危害を加えはしないと約束して安心させたこともあった。しかしヴァーグナーへの余りにあけすけな信仰告白と、執拗な大学への求職活動が、ついに批評家を不倶載天の敵と化するに至るのである。

こんな世俗の重なる悩みにもめげず、作曲家の「交響曲熱」は癒し難く進行して、夏休みにはザンクト・フロリアンで第4番の終曲の草稿を仕上げる。終曲の主題は、かつて師であり友であったドルンが夢の中に現われて授けたものというが、作曲者はそれをこう回想している。即ち「ドルンは、第3楽章まではもう仕上がった。第4楽章の主題もすぐ出来る。と言うなりピアノに向ってそれを私に弾いて聴かせてくれた。驚いて目が醒めるとまだははっきりと耳に残っていたその主題を書き留めた」というのである。二年まえの初夏にヴァーグナーがウィーンを訪れて催した音楽会をも訪れてまもなくこのドルンは狂死している。ところで当時の彼の興味の的が、不幸な最後を遂げたメキシコ皇帝マクシミリアンと、いま一つ帝国の北極探検隊の一挙手一投足であったというのもおもしろい。

第4交響曲の初校は、わけても彼が重んじていた音楽の守護聖人ツェツィリアの日にめでたく完成をみるものの、音として鳴り響く目途も立たず、加えて、友人知人やその間にフィルハーモニカーの指揮者となったヴァーグナー指揮者リヒターの尽力にもかかわらず「ヴァーグナー交響曲」は楽団の反対で容易に上演にこぎつけない。一方ハンスリックも多少は折れたものか、ブルックナーは大学のとりあえずは無給講師として和声と対位法を講ずることを許され、その就任講演は、かつてのシラーのイエーナ大学への就任演説にも比べられる盛況を呈した。しかし皮肉にも、これはまたハンスリックの「一人の聴講者も得られまい」との毒舌が、かえって物見高い人々の興味を掻き立てるのに功を奏した結果かも知れない。講義では時に自作から引用して我を忘れることがあったという。

次作第5番の初稿を完成させ、夏にはバイロイトで「指輪」の初演を見聞、その折の知己タッペルトを頼って第4番のベルリンでの上演を目論むが、或るいはハンスリックを恐れてウィーン上演を避けるつもりだったかも知れない。改作してなお再度演奏拒絶に遭った第3番がようやく陽の目をみるその直前、最も頼りとする庇護者でかつまた今回もおかげで上演にこぎつけたヘルベックが突然死去、心に懐滅的な打撃を受けながらも自ら指揮台に立って敢行した師走16日の初演は空前の失敗となった。それでも年明け早々次作第5番の改訂を了え、全力をあげて第4の改作に取り掛かるが、その間上述のタッペルトに「旧稿の非現実的な第4交響曲」のアダージョの「難しく演奏不可能なヴァイオリンの音型」を弁解している。翌80年の7月5日には新たに「狩のスケルツォ」を第3楽章に配して改訂を完了、終曲以外は年末と年明け早々と音楽院の学生たちによって試演された後、「定期」演奏会の枠には入らないながらも兎も角フィルハーモニカーに採り上げられる運びとなる。すでに練習時にも陶然として茫然自失の作曲家が指揮者から不明の音符を尋ねられて「どうかお心のままに」と応じた話しは有名である。ハンス・リヒターの棒で81年2月20日に初演、ベートヴェンのシユテファン王序曲とピ

アノ協奏曲第4番（独奏はビューロー）、ハンス・フォン・ビューローの「歌人の祟り」の後に演奏されたこの曲の成功によって、夙に名望あるオルガニストは遅ればせ乍らようやく作曲家として世に一步を踏出すに至った。

踏出した一步はしかし必ずしも順風満帆の進行を遂げるわけにはいかない。生前に最も成功した第7交響曲の後には自信作第8番が腹心の友からの拒絶に出会って再び苦汁を吞まされる等、晩年にいたるまでその生涯は一向に明暗が定まらなかった。

偶たま客演した独特無比のテンポ設定で知られるチェリビダツケ率いるミュンヘンフィルの第7番を楽友協会ホールに聴く機会を得たが、第4と同じく夢の中で亡友ドルンから主要主題を授けられたというこの曲の、スケルツォに至って突如、途轍もない大波の律動に拉し去られる思いがした。巨大な球形が上下するかの如き拍動の反復は、このうえなく単純でありながら万象を巻き込んで倦むことを知らぬ地軸の回転にも直結する。この楽章の思いがけぬ側面を垣間見た気がして、今も記憶に残っている。

神経・筋肉の疲れ



…体が重い!



ビタミンB₁・B₆・B₁₂ 製剤
ガンマーオリザノール 配合

Esfait® Gold

(適応症) ●筋肉痛・関節痛(腰痛・肩こり)、神経痛、眼精疲労の症状の緩和
●肉体的疲労時、妊娠・授乳期、病中病後の体力低下時のビタミンB₁・B₆・B₁₂の補給

90錠：2,000円 / 180錠：3,800円 / 240錠：4,800円



エスエス製薬

本日の出演者

●コンサートマスター

第一ヴァイオリン

生山陽
鈴木薫
角川総
竹内一
鈴木淳
堤哲
堂祐
中本
永渡
二田
福原
松延
松本
渡辺
横田

第二ヴァイオリン

秋元陽
石井久
石井優
石本惠
岩田德
亀井玲
須根和
根守弘
久田し
松山和
三木美
本厚
村千
渡山
安田直
横佐

ヴィオラ

岩本 泰
齊藤 十一郎
高橋 継
竹内 ひとみ
星野 昭
水村 一
村横 雄
若林 繁

チェロ

池田 寛 之
倉沢 由 和
佐藤 千鶴子
サレンゴア 千鶴子
マックスウエル 清
瀬川 扶
田頭 明子
南樋 口進
樋口 耕二
福原 朝之
横渡 之
渡 潔

コントラバス

池田 正
内田 子
菊池 葉
鈴木 重
村山 信
山本 和
李宮 隆
本 彰

フルート

木村 純 一
村真 論
藤洋 紀
佐藤 行

オーボエ

荒井 淳
宇田 知
大坪 昌
坪 彦

クラリネット

一瀬 直 美
多田 準 也
時藤 嗣 雄
半野 智 人
吉野 久

ファゴット

牛奥 孝 男
小島 厚
戸川 安
儀木 富
儀 貴
子

ホルン

河野 正
越塚 利
近藤 恒
嶋村 朋
林田 友
藤井 司
山本 内
内木 正
市彦 彦

トランペット

安藤 宣
一新 井 一
中本 村 宏
村 肇

トロンボーン

久保 昭
久篠 樹
敷古 裕
古河 一

チューバ

渡辺 鉄 雄

テンパニーニ・打楽器

都築 裕
岩橋 正
木村 範
村 治
子

平成6年度 市川交響楽団 役員

雄子一児夫子継
行和純哲恒玲行
田山村村井橋
横松木堤嶋亀高
長フー報画務財
副弦管打楽器チ
副団チー
治雄央理紀一人
正康惠論公嗣
上田塚本真村藤
村時越石木村中
長務計計外局
幹事
団幹総会会渉事務

【市響賛助会員】

赤松憲樹飯田修二草野キヨ田中洋萩原和子牧野賢一
東由葉千惠院去雅久栗原定雄
阿野良行一内田孝一賀正一
蚊野健太郎浮谷悦一郎古賀正
石井井昭正原隆一郎野藤嘉
今井井昭正原隆一郎野藤嘉
出野野昭正原隆一郎野藤嘉
岩野野昭正原隆一郎野藤嘉
伊藤藤賢勇延庸茂裕純信令
伊藤藤賢勇延庸茂裕純信令
岩飯飯飯飯飯飯飯飯飯飯飯
飯飯飯飯飯飯飯飯飯飯飯飯飯